

愛と結婚と自由

辻 憲男（文学部教授）

旧制の親和女学校出身で文学史に名を残す人は、歌人の川端千枝である。明治38年（1905）に卒業し、父の縁の洲本の裁縫学校に入った。母ゆずりの美貌が目を引き、たちまち小地主の息子に“見そめられて”結婚した。両親はすでになく、継母が送り出してくれた。しかし四年後、夫は大酒がたたって急逝した。姑と幼な子をかかえて、家事や機織りの合い間に短歌を始めた。夫の旧友の「思ったことをすらすらと述べればいい」の言葉に励まされた。最初の歌は、

人みな瞳（め）の冷さよ小いそぎに町を出はづれほと息づきぬ
町外れに来て、思わずため息をつく。小説家・吉屋信子はこれを、「鶏の羽根のショールを勇敢に肩にして出かけた時『川畑の御新造さん、後家になられたら、はでなことなざるナア』と、町の人々の好奇の眼がそそいだ」のだろうと想像している（『ある女人像』。川畑は本姓）。娘・加寿の回想記によると、千枝は内気で無口なほうだったが、当時流行した「カチューシャ可愛いや別れのつらさ…」の唄をよく歌った。淋しい母が薄幸のカチューシャのように思えたという。

まだ電灯もない頃の淡路の、旧習の婚家への義理を全うした。自由を求めて娘とともに上京し、尊敬する前田夕暮に師事した。北原白秋らと相知り、同好の知友も増え、日々生き生きと朗らかに暮らした。だが師との親密さがうわさになり、心ならずも結社を退いた。再婚の話も再三あったが、実らなかった。－弱き身に今の安さも捨てがたし縁談のありてしみじみおもふ－



かつての紡績工場の赤レンガは、いま図書館などの公共施設に。